

李燕 昭夫
琴子 直文
小百合
福江

数日後の夜――

物干し台に、昭夫が出てくる。会社帰りの格好。

昭夫、周りの風景を少し眺める。

李燕の部屋の窓は開いていて、中から教科書を読む声が聞こえる。

昭夫、何となく聞きながら、出ている木箱に腰を下ろす。

李燕の声 タケシはミヨコにコンサート切符を買ってあげました。タケシはコンサートの切符をミヨコに買ってあげました。ミヨコはタケシにコンサート切符を買ってもらいました。ミヨコはコンサート切符をタケシに買ってもらいました。誰がミヨコにコンサート切符を買ってあげましたか？

李燕、読みながら、窓辺にくる。

李燕 タケシはミヨコにコンサート切符を買ってあげました。(本を閉じ、言い換えてみる) タケシはコンサート切符にミヨコを買ってあげました……タケシはミヨコ……をコンサートの切符……

に買ってあげました……タケシをミヨコはコンサートの切符に……

昭夫 (たまらなくなり) 違ってんぞ、それ！

李燕 ……また来たか？

昭夫 今の間違ってますよ。も一回、教科書読んでみ。

李燕 読んでみ？ みは何か？ なぜ、みで止まるか？

昭夫 読んでみなさい。読んでみたらってこと。

李燕 みで止めるもいいのか？

昭夫 止めなくてもいいよ。途中で止めない方が、ちゃんとしてますよ。

李燕 しかし、止めるもいいのか？

昭夫 もういいよ。通じてるよあんだ。かなりブローケンだけど。

李燕 ブローケン困る。検定受ける。大学行く。資格、二年以内ね。あと一年。テニヲハなければ、

困らない。テニヲハの困る、とても。

昭夫 まあ、頑張ってくださいよ。希望がいっぱい、夢いっぱいだ……

李燕 疲れたいるね？

昭夫 ……

李燕 疲れたいるのだろう？

昭夫 ああ、疲れたいるよ、とても。

李燕 疲れたで来たか？

昭夫 そうです。オジサンは疲れてね。

李燕 疲れてだ、疲れてが正しい、疲れてで来たのだな？

昭夫 よしてよ、余計疲れるから……

李燕 間違いは、言ってくれ。

昭夫 今度ね。もつと元気なときにね……

李燕 福江とお話したか？

昭夫 お留守だよ。鰐皮の財布がなかった。遠くにお出かけた。

李燕 また見たね財布。

昭夫 見たよ。この間はありますがとうございました。

李燕 どういたしまして。

昭夫 はい、お勉強してよ。オジサンにかまってないで。

李燕 お勉強している。福江は出かけた。ビヨーン行つた。

昭夫 病院？ 病院に行つたの！

李燕 にだ。ビヨーンにが正しい。ビヨーンに行つた。

昭夫 ねえ、母さん、病気なの？ 風邪でもひいた？

李燕 風は吹く。吹くない。吹くます。吹く。吹くとき……

昭夫 ちよつと、勉強やめてよ！ 母さんは、こんな時間に病院に行つたのか？

李燕 病気のないよ。風も吹くない。

昭夫 わっかんねえなあ。もつと勉強しなよ！ 検定、危ないぞ！

李燕 検定、危ない。危ないは私。でも、検定危ない言う。私が検定の危ないが正しいか？

昭夫 わかつたわかつた、もういいよ！

琴子の部屋の窓が開く。

琴子 (昭夫に) あら、聞いたような声だと思ったら……

昭夫 母が病院に行つたようなんですけど、何かご存じありませんか？

琴子 病院？

昭夫 ええ、今この方が……

李燕 学校に行くのとき会つた。ビヨーンに行くと言つた。

琴子 じゃ、お昼頃でしょ？

昭夫 お昼頃！

琴子 (昭夫に) まだ帰ってないんですか？

昭夫 ええ……

琴子 どうしたんだろ。あの日以来、ちよつと元気はなかったんですけどね……

李燕 ゴチャゴチャと言つた。頭がゴチャゴチャで、どうしようもないと言つた。

琴子 えーっ、そこまできてたの！

小百合が物干し台に出てくる。

小百合 誰よ、夜の帳を切り開くのは……

琴子 福江、病院に行つたんだつてよ。

小百合 昭夫ちゃん！ 来てたの。

琴子 聞いてる？ 福江が病院に行つて、まだ帰つて来ないの。

小百合 (昭夫に) えっ、そうなの？

昭夫 僕は今、来たばかりで……

李燕 ビヨウイン、行くのとき会った。あれから、長い時間がたった。今のあつてるか？

琴子 あつてるあつてる。今はお勉強やめようね。

小百合 誰かのお見舞いにでも行つたんじゃないの？ 朝、うちの店に来たわよ。胡麻とシソの詰め合わせ買つてね。番場特選つての。

李燕 煎餅持たないかった。ビヨウインは煎餅いらない。

琴子 そうよねえ。煎餅食べられる病人つて、あんまり聞かないわ。

小百合 だって本人は病氣になんか見えなかったわよ。四千二百円のにするか四千五百円のにするかで、さんざん迷うエネルギーあつたからね。それで、三千円のにするんだもん。パーマ代も高くなつたから儉約だとか言い出してさ。

琴子 パーマ代？

小百合 上がったんだつてよ、エリカさんとか。

琴子 李燕、もしかして美容院のこと言つてる？

李燕 はい、ビヨウイン。

小百合 NO！ それはビヨウキで行くところ。頭、キレイ、キレイはビヨウイン！ リピート、プリーズ、ビヨウイン！

李燕 ビヨウイン、ビヨウイン……

小百合 アテンション！ ビヨ、ビヨ、ビヨウ……

琴子 はい、あとは自習しましょう。(昭夫に) ということなんじゃないのかな。お土産を買つて、美容院に行つたと。お出かけだわね、どこかに。(と、部屋の中へ)

小百合 どこだろ？ カッコつけたいような、つけないような相手だね、煎餅の値段からして？

昭夫 もういいです。すいませんでした。

李燕 ビヨ、ビヨ、ビヨウ……(と、言いながら、部屋の中へ)

小百合 じゃ、遅いかもしれないよ。うち来て待つてたら？

昭夫 もう帰りますよ。

小百合 ご飯は、食べた？

昭夫 昼が遅かったから……

小百合 うちはこのからなのよ。チキンライス、作つたげようか。昭夫ちゃんの誕生日、いつもチキンライスだったじゃない。隅田川の花火見ながら、そこで食べたことあつたよね。昭夫ちゃんがグリーンピースつまみ出して、お皿のはじっこに並べてんの、私がどんつまんじやつてさ。お母さん、怒つたよね。何とか昭夫にグリーンピース食べさせようとしてんのに……

昭夫 ……

小百合 グリンピース、まだ嫌い？

昭夫 僕はいいいから。皆さん、待つてるんでしよう？

小百合 あの人ね、あの土足の乗り込み男、トイレのビートルズに感心してた。ああいうときでも、感心はするんだねえ。見直したつて感じだった。

琴子 (外階段の踊り場に出てきて) あの頃、私は中学生よ。お昼休みに放送部がビートルズ流してね、「抱きしめたい」がよくかかった。熱くなつたなあ……教室で聴くビートルズって格別だった。

隣じゃ坊っちゃん菊りの男の子が弁当かきこんでさ、私はここにとどまらないぞって思った。

小百合 私は都はるみだったわね。さよなら、さよならって歌いながら学校に行ったよ。冬なんか、マフラーの中に息がこもって、なまめかしいの。あ、歌手になるんだって全身がしびれたわ。うちで歌うと煎餅が腐るって怒られるから、学校の行き帰りだけよ、レッスンできるの。歌謡学院の試験受けたら、声がこもってますねって、言われてさあ……

琴子 運命もたまには正しい選択をするってことね。

小百合 どうだろねえ。歌手になつときや、今ごろ暇で楽だったんじゃないの。煎餅屋のカミサンがこんなに忙しいなんて、あんた、これからまだ帳簿つけるんだよ。

琴子 さあ、そろそろ、夜の帳を下ろしましょうよ。

小百合 この人ね、土足男のこと追っかけてって、慰めたのよ。どん底の人生も悪いもんじゃないって。かなり効きめあったんじゃないかね。この人、どう見たってどん底でしょ？ 五十過ぎて、四畳半一間だよ。それでもけっこう楽しそうにやってるから……

琴子 昔つかみみたいに言わないでよ。ご令嬢だったのよ私。パパはネジ作る会社の社長でね。東京オリンピックの頃はパパの顔なんて見たことないわよ。増産増産で、あちこちの工場飛び回ってた。それで、よくあるじゃない、ヒッピーみたいなのカッコいいと思っちゃうご令嬢ってさ。そこからよね、幸せな人生が始まったのは……

小百合 バツ四よこの人、バツ四！

琴子 失礼ね、バツ三よ！

小百合 ごめんごめん、まだバツ四になりかけてるとこだ。貧乏な男ほどカッコよく見えるっていう病が果てしなく続いたんだって。そいでまあ、結婚のたんびに生活が落ちて……

琴子 わが国の経済成長に身をもって抵抗したってんですか。もつともね、バブルの頃は、いささか意に反した生活を送りましたね。あのときのダンナはゴルフウェア作ってたから、リゾートマンシヨン二つに別荘一つ！ 別府と蓼科とグアム島に。厭だったわあ……

小百合 そのダンナとさ、こないだ渋谷ですれ違ったんだって。

琴子 いいから、ご飯、作んなさいよ。

小百合 キヤッチセールスやってたんだってよ、そのダンナ。若い女に馬鹿高いファンデーション買わせようとして……

琴子 騙されるな！ 若い女よ！ って叫んでやった。

小百合 ちっちゃい声だったらしいけどね。そしたら、指輪返せって、逆に追っかけられたんだって。今もはめてんのよ、そのダンナに貰ったエメラルド。

琴子 逃げまくりましてね、無事ですわ。（と、昭夫に指輪をはめた手を見せる）

小百合 ね、こういう楽しい人生もあるんだからって、つながないけどさ、結局どうなったの、あの人は？

昭夫 え？

小百合 あの土足の……

琴子 いいじゃないのよ、もうそんなこと。

小百合 私はさ、昭夫ちゃんの辛い気持ちかわかるから。うちだって、どうしようもないパートさんをクビにするとき、私が鬼になるんだから。こつちだって、そういう日は眠れないよ。でもね、番場屋の味を守るためには、醤油塗りのパートだっておろそかにはできないのよ。

琴子 お宅の醤油塗りとは違うわよ。改革者よ、あの人は。新しい世紀をさわやかに疾走する車体！

さらば二酸化炭素よ！ 水素と酸素の美しき出会いよ！

小百合 何よ、それ？

琴子 ハイブリッド・カーってそういう車なの！ その実現を目前に、彼の夢は無残にも打ち砕かれ……

昭夫 彼はね、円満退職しましたよ。新しい就職先も決まったし、退職金も定年扱いとして、最高額を受け取る予定です。

小百合 へえ、よかったじゃないの！ 昭夫ちゃんが頑張ったんだね……

昭夫 新しいとこだって車関係だから、これまでの経験も生かせるし……

アパートの階段の踊り場に、木部が踊り出る。

木部 嘘つけ！ 俺は解雇になった！ よくもいけしゃあしゃあと……

小百合 アンタ、何でそんなとこに……

琴子 パソコン直してもらってんのよ。この人、機械強いから……

小百合 ちよつと、ちよつと、ちよつとちよつとお……（と、物干し台から姿を消す）

琴子 来ないでよ！ 婿どのが腹をすかしてでしようが！（あわてて中へ）

木部 悪魔め！ このままですむと思うなよ！

木部 昭夫を睨みつけて、中に去る。

昭夫、しばらく動けないでいる。

李燕が、また窓から顔を出す。

李燕 ひとりっ子か？

昭夫 そうだよ……

李燕 私もひとりっ子。私は国の、考えの、ひとりっ子。あなたは、自然の、ひとりっ子ですか？

昭夫 知らないよ……

李燕 あの男は誰ですか。彼は、昭夫の知り合い、で、琴子も知り合い、正しいか？

昭夫 そんなに勉強してどうすんの？

李燕 アルバイト定休日だ。かき入れどきな日だ。たくさん勉強する。日本の大学行く。文学部だ。

天津に帰り、日本語の先生になるだろう。ひとりっ子だ。親の助ける。正しいか？

昭夫 正しい正しい……

李燕（教科書を閉じ）ミヨコは、タケシ、を、コンサートの切符、に、……

昭夫 間違つてんぞ！ 検定落ちるぞ！

李燕 落ちるの言うな！ 受かるの決意だ！（と、窓を閉める）

昭夫（しばらく躊躇してから、琴子の窓に向かい）木部！ おい！ 木部！

小百合がアパートの階段を駆け上がる。昭夫、あきらめて、中に入る。

小百合、琴子の部屋のドアをノックする。琴子、いきなり踊り場にでてきて、

琴子 だから、あの日の帰りに、パソコンの話になっちゃって。それだけのことなんだから……

小百合 修理なら電気屋呼びなさいよ。あんなの引き入れてどうするつもりよ。

琴子 私、最低生活なんだからね。電気屋なんか来たら、どれだけとられるか。あの人ならお宅の煎餅ですみそうじゃない。番場特選買ったげるわよ。

小百合 まさかタイプだなんて言わないでね。ああいう破滅状況にある男、そそられるんでしょ、あんな……

琴子 やめてよ。もうお嬢ちゃまじゃないんだから……

昭夫の部屋（二階）に明かりが灯る。

小百合 あ、昭夫ちゃん、あそこにいる。中学のときなんて、そこ（小百合の物干し台）から昭夫ちゃんの部屋見てね、まだ起きてるなんて思ってたんだ。

琴子 よかったね、実らぬ恋でさ……

木部（顔を出し）綿棒なんかありませんか？ マウスのローラー拭きたいんで。

琴子 ああ、はいはい……（と、中へ入り、ドアを閉める）

小百合 ちよつとちよつとお……

と、追おうとするが、ドアは開かない。小百合、階段を降りていく。

茶の間には福江が現われる。着物姿。玄関の方から来て、いきなり卓袱台の前に座る。追って、直文。こちらは居心地悪そうに立っている。

直文 ……電気、つけないの？

福江 うん……

直文 だって、暗いでしょう。

福江 いいの。しばらくこうしてるから……

直文、ややかしこまった様子で、福江のそばに座る。

直文 そんな寂しいこと言わないで……

福江 寂しくないわよ、別に……

直文 寂しいよ……

直文、立ち上がり、電気をつける。福江、直文に背を向ける。

直文（また座り）ほら、こっちを向いてちょうだいな。

福江 やだ……

直文 じゃ、僕がそっちへ行きますか……（と、立ち上がろうとする）

福江 やだ！ 来たら噛みつくから……

直文（また座り）困りましたねえ……

電話が鳴る。福江、ベルの音を少し聞いてから出る。

福江 はい……あ、ごめんなさい！ 今日私の番だったわね。生きてますよ。大丈夫ですよ。今日
はね、お友達のおうちにお呼ばれだったの。今帰ってきたとこ。心配させてごめんなさい。……う
ん、その息子さんのご夫婦がね、とつてもよくしてくださって、スパゲッティの名前のわかん
ないの、ご馳走になりましたよ。とつてもおいしかった。サラダも出たわ。これもシャレてね、
名前のわかんないお野菜が入ってた。外国のかわね、高そうなお野菜。(笑い)私、とつても緊張
しちゃって、その名前のわかんないお野菜を床に落としてね。恥ずかしかった……そう、お箸が一
番よ。ナイフとフォークなんか使うもんじゃないわねえ……はいはい、明日は必ずかけますよ。お
ばあちゃんも頑張って生きててね。はい、それじゃ……(切る)

福江、また座って押し黙る。

直文 あなたは大変に素敵でしたよ。ちつとも、気にすることなんか無い。

福江 ……

直文 そりゃ、多少、いつものあなたより、落ち着きがなかったかもしれないけれど、それは文彦が、
あんな態度に出たからで……全く、どうしちゃったんだろうな、アイツ……

福江 ……

直文 きつと、あなたが予想以上に素敵だったんで、あわてたんだな。そうだ、戸惑いの表れですよ、
あれは……

福江 ……

直文 もつと穏やかな、茶飲み友達を期待してたんだな、ウン……決してそれ以上であってほしくは
なかったんだ。いや、うかつでしたよ、僕も。日頃の言動からして、そう物分かりのいい方じゃな
いってのはわかったのに、つい期待するところがあつて……

福江 ……

直文 ですからねえ、コレ、あが君、ちよつとこちらを向いてたもれ。

福江 ……

直文 ですから、ここで言い出しちゃまずいと、僕も警戒したわけです。ここは長期戦で行こうとね。
テキの出方を見ながら……

福江 ……

直文 アイツもたぶん、反省してる。見送りに出なかったのは、あれは自分が情けなかったからだ。
今頃自己嫌悪だよ、ウン。康子だって、亭主のあんな振る舞いには黙っちゃいないだろうからね。
今頃お説教されてますよ。帰ったら、謝るんじゃないかな。そうだ、帰ったら、すぐ言おう。ウン、
このタイミングがいいかもしれない。帰ったら、すぐアイツを呼びつけて、おい、父さんの決意を
聞け。父さんはあの人と……

福江 もういいわよ、でもしないことを……

直文 言つてやる。猛烈に腹が立ってきた。

福江 言えやしないって。言えないから、ここで言ってるのよ。

直文 今言つてやる！ 帰るまで待てない。

直文、机の前に行き、電話をかけ始める。

福江 (少しあわてて) あが君、やめてよ、私がやらせたみたいに思われるから……

直文 (電話に) あ、康子さん。文彦呼んでくれないかな。早急に話があるんだ。……え? 風呂入ってんの? ……あ、そう。いや、いいよ。自分で言うから。じゃ…… (切って) 風呂だつて。いっつもより早いな。後でまた……

福江 ホツとしたつて顔してる。

直文 してませんよ。

福江 してるわよ。さっき言えなかったことが、何で今言えますか。言わなくていいわよ。その気もないくせに……

直文 その気もない? じゃ、僕が今日、息子夫婦にあなたを引き合わせたのは、あれは、その気もなくてやったことなんですか?

福江 あつてもないのよ、直ちゃんは。私、わかったもん。直ちゃんが私のこと恥ずかしがつてんの……

直文 そりゃ、照れはありますよ。この歳になつての、こういう成り行きは……

福江 そうじゃなくて、直ちゃんは私のこと恥ずかしがつてた。こんな、小学校しか出てないような、ナイフもフォークも使えないような、飛行機にも乗ったことがないような……

直文 今度乗せます! 新婚旅行で乗りましょう!

福江 やだ! そんなの乗ったらまたヘマやるから。あなたが恥かくの見たくないもの。

直文 恥なんかかきません! 僕はあなたが誇らしい。あなたほど素直にいろんなことを間違えて、「これ、なあに?」と何のてらいもなく聞く人を、僕はかつて見たことがない。感動します。人間

はこうでなきゃいけない……

福江 二人つきりしているときはさ、直ちゃん、私の馬鹿にも感動してくれるよね。コンセプトのこと、コンセプトって言つても、大笑いして喜んでくれる。でも、人の前では違うじゃない。今日だつて、掛け軸の字を間違えて読んだとき、直ちゃん、顔がこわばつてた……

直文 あれは、来てすぐだったから、いや、こわばつたりなんかしませんよ。

福江 こわばつた顔して、すぐに文彦さんの方を見て、文彦さんが呆れた顔してんの見て、ますます顔がこわばつて……

直文 そんなことないつて……

福江 あ、ここは違う世界なんだつて、すぐに思った。ここじゃ、いつもの直ちゃんと私じゃ通用しないんだつて……

直文 もういいから、先のことを考えようよ。

福江 恥ずかしかったわ。トイレのスリッパ履いたまんま戻ったときも。お孫さんが、すぐに見つけて笑いだして、私もここは笑うしかないつて笑つたけど、直ちゃんは……

直文 僕も一緒に笑つたでしょう。

福江 下向いてね。下向いて笑つた。本当に恥ずかしそうだった。

直文 そう見えたのなら、ゴメン。そうじゃなかったんだだけ……

福江 お嫁さんも大学出てんのね。そんなの、今は普通か。でも私、大学出てる人が三人もいるところに行ったことないのよ。急にそんなこと思つたら、もう口もきけなくなっちゃつて、あとはただ、サラダをこぼすだけよ。スパゲッティも鼻の頭にはね返つたしね。お宅の孫、よく笑うわねえ……直文 家族のみんなに、あなたの素晴らしさをわからせたい。もう一度チャンスをください。あなた

がのびのびと振る舞えるような雰囲気を作るから。

福江 文彦さん、何で急に土地の話なんか始めたの？ この土地はそっくり子供に残したいなんて。

まるで、私がかつさらつてでもいくみたいにな……

直文 あれは口癖だよ。アイツの仕事だつて、そううまくいつてるわけじゃないんだから……

福江 そうかしら？ 今さら結婚なんてさせないぞつて、そう言つてるように聞こえた。

直文 反対なんてさせないよ。こっちは自由だ。

福江 昭夫もこんな承知しないわ。今のあの子がこんなこと聞いたら……やつぱり私たち、このま
んまがいいんじゃない？

直文 僕はね、毎日残り時間を考える。これまでの、生きた時間も考える。生きたいように生きた時
間は、そのうちどれだけだっただろう。この先に残された時間も、今までのように過ごすのか？
男の平均寿命から、自分の歳を引いたりする。そして、あわてる。本当は、もつともつと少ないか
もしれないのに……

福江 直ちゃんも歳よりずっと若いわよ。初めてお教室覗いたときね、あな若々しつて思つたわよ。
六十二、三かなつて。

直文 あな憎し！ それねえ、この前は五十五、六つてのたまひけるにあらずや？

福江 そうだったつて？

直文 ほら、記憶の中の僕にしたつて、年令は一挙に七、八歳も上がつて。つきあつてみたら、歳
だったんだよ、やつぱり。残り時間を考えましようよ。一緒に暮らそう。コソコソしないで、堂々
と、カップルとして……

福江 暮らせば、困る、直ちゃんが……

直文 困りません！ 友人にもパートナーとして紹介したい。その着物がいいなあ。またそれを着て
ください。その色合いが月影に映え、あなたの美しさがいつそうさえざえと……

福江 お友達つて、お偉い先生方なんですよ。直ちゃん、今日より恥かくわよ。

直文 いい加減にしないさい。死んだ女房にだつて、これほどの口説き文句は並べませんでしたよ。全
くもう……（と、ガラス戸に向かって立ち）行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空な眺
めそ……（と、夜空を眺める）

福江 ……

直文 はい、今のを口語に訳して。

福江 えっ……

直文 先週やつたところですよ。須磨の段。光源氏が花散里にこう言いましたね？

福江 （覚束なげに）ああ、花散里にね……

直文 どういう意味ですか？

福江 えーと……

直文 行きめぐりつひにすむべき月影の……

福江 行きめぐつて……ついに……ついに住むべきである……

と、ガラス戸を向いたままの直文に気づかれぬよう、机の抽斗の方に寄る。

直文 ノート見ちゃ駄目！

福江 （立ち止まり）……

直文 「すむべき」の表す意味は？

福江 え……

直文 つひにすむべき月影の……

福江 あ、月に、影になって出るように、やがては住むべきだという……

直文 月に住む？ 兎みたいに？

福江 じゃなくて、最後にはみんな月に行くという……

直文 月に行く？ アポロの宇宙船みたいに？

福江 じゃなくて、本当に行くんじゃないで、魂がさ……

直文 いいですか。たぶんあのときの源氏はこういう風情ですよ。（と、ある表情をもって月を眺め）
行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空な眺めそ……さて、そのココロは？

福江 月を眺めている……

直文 どんな思いで？

福江 曇ってるなあと思って……

直文 源氏は天気予報でもやってるんですか？

福江 もういい！ こんなときにお勉強なんてやあよ。

直文 源氏はね、曇のかかった月を見て、こう思ったんです。今はいろいろな誤解を受けているけれども、やがてはその誤解も晴れる。時がめぐりめぐって、あの月影の曇りもとけ、澄んだ明るさに輝くように。そして、ここが掛け詞（ことば）ですね、あなたとも住む、つまり暮らすね、そういうときが来るから、どうか悲しまないでくださいと。

福江 住んだの、花散里と？

直文 いや……

福江 そうよね。その後もいろんな女のとこ回って、言ってもしょうがないようなこと言って……

直文 そうだけどね、感慨深いじゃないですか、こういう困ったときにも、源氏と心を重ねられる、そういう状況に僕たちはいるんだ。教授時代なんてのは、仕事と生活に追われるだけで、源氏は講義のテキストに過ぎなかった。今はね、ちよつと現実だ。

福江 感慨深いわ、私が花散里だつてとこが。紫の上じゃなくって。

直文 こないだやったばかりだからだよ。紫の上にしたっていいですよ。

福江 お風呂、出たんじゃないの？ 電話してみたら？

直文 え……うん……

直文は動かない。

福江、机の前に行き、受話器を取り上げて、直文の方に向ける。

福江 ほら、つひにすむべき月影のつて、文彦さんにも言っちゃってよ。

直文 やっぱり、顔見て言う方がいいよ。電話じゃさ……

福江、受話器を置き、座る。

福江 帰って。今日でオシマイにしましょう。

直文 オシマイ……？

福江 こんなたくさん！ もうたくさんよ。私、恐い、こういうの。いい歳してって笑われる。笑われるんならまだいいわ。みんなきつと気持ち悪がる。七十過ぎて、いやらしいって……

直文 どこがいやらしい？ どこが気持ち悪い？ 僕たちが、こんなに幸福になれる関係が、いやらしいはずないでしょう。全世界に言ってやる。何か、文句あるかあつて。

福江 笑わせんじやないわよ、このコンコンチキ！ あんなに息子にヘーコラしといて、全世界とは恐れ入る。安全地帯で吠えてんじやないよ！

直文 あが君、どうか……

福江 あの高慢チキな息子は何だい！ うちの悪魔より凄じやないか！ あんなの育てた腑抜け男とロマンスするほど暇じやないよ！ 出て行って！ おととい来やがれ！

直文 うまくやりたいんだ、わからないかな、逃げてるんじゃないんだよ……

直文、福江を抱きしめる。

福江（泣き出し） 似合わないんだから私たち、今日の、文彦さんの、私を見る目……ああいう目にみんながなるんだ……

直文 乗り越えよう。悪魔も文彦も。全世界を踏み倒して行こう……

福江 直ちゃんて、口ばかりねえ。勉強すると、そんなに意気地がなくなるの？

直文 できる、福江さんさえいれば、これまでできなかったことも、きつとできる……

福江 悪魔がこういうとこ見たら、死ぬわね……

一人、だんだんとキスの態勢。階段に隠れていた昭夫は飛び出す。

昭夫 やめろよ！ ホントに死ぬから！

福江と直文、仰天して離れる。

昭夫、そのまま茶の間を突き抜け、台所へ。流しの前に立つ。

昭夫（台所で） ぶお……（と、吐きそうな声）

直文 あらあ……

福江 何だい、気分が悪いのかい？

昭夫 ……

福江 そうなる前に、咳払いぐらいしなさいよ。すぐに出てくりやいいものを、同情なんかしないわよ。

昭夫 ……

福江 こういうのはね、勝手に見た方が悪いんだ。私、恥ずかしくなんかないからね。直ちゃんだつて、そうですよ。私たちは、誰憚ることもない……

直文 福江さん……

福江 言いましょうよ。こうなっちゃったんだから……

直文 でも、あんなご様子でいらつしゃるのに……

福江 芝居よ。意地が悪いったら……

昭夫　ぶお……

福江　昭夫、ホントに吐きそうなの？

昭夫　……

直文　帰ります。僕はいない方がいい……（と、足早に出ていく）

福江　直ちゃん……（と、追う）

昭夫、台所から出てきて、ただ立っている。福江、戻ってくる。

福江　スパイだね。会社じゃこういうことは普通かい？

昭夫　……

福江、階段を上がりかける。

昭夫　その足袋、父さんの作った足袋だろ。

福江　（立ち止まり）……

昭夫　そんなもん履いて、よくあんな男と……とんでもねえぞ！

福江、階段を上がっていく。

昭夫　母さん、ホントに母さんかよ！　悪魔になったの、母さんじゃないか！

昭夫、立ちつくしている。